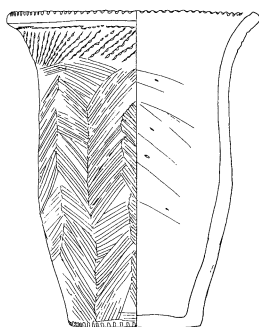


鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（47）

県道鹿児島川辺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳴野原遺跡



2002年12月
鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、県道鹿児島川辺線改良工事に伴って、発掘調査された川辺町鳴野原遺跡の発掘調査報告書です。鳴野原遺跡は川辺町の神殿小学校の西側、神殿川の河岸段丘上に立地する縄文時代早期の遺跡です。遺跡は小規模ながら、縄文時代早期の石斧の使用場所と考えられます。河川沿いあるいは盆地を舞台として、地域的に縄文時代の生業や縄文時代人の行動パターンを知るうえで、興味深い事例であります。

こうした小さな遺跡の事例の積み上げが地域の歴史像の解明に結び付いていくものと期待します。また本県を代表する縄文時代早期の上野原遺跡では石斧のデポが検出されており、所蔵→使用→破損→再生作業→使用→廃棄へ至る、石斧という道具の姿を具体的にイメージさせてくれました。

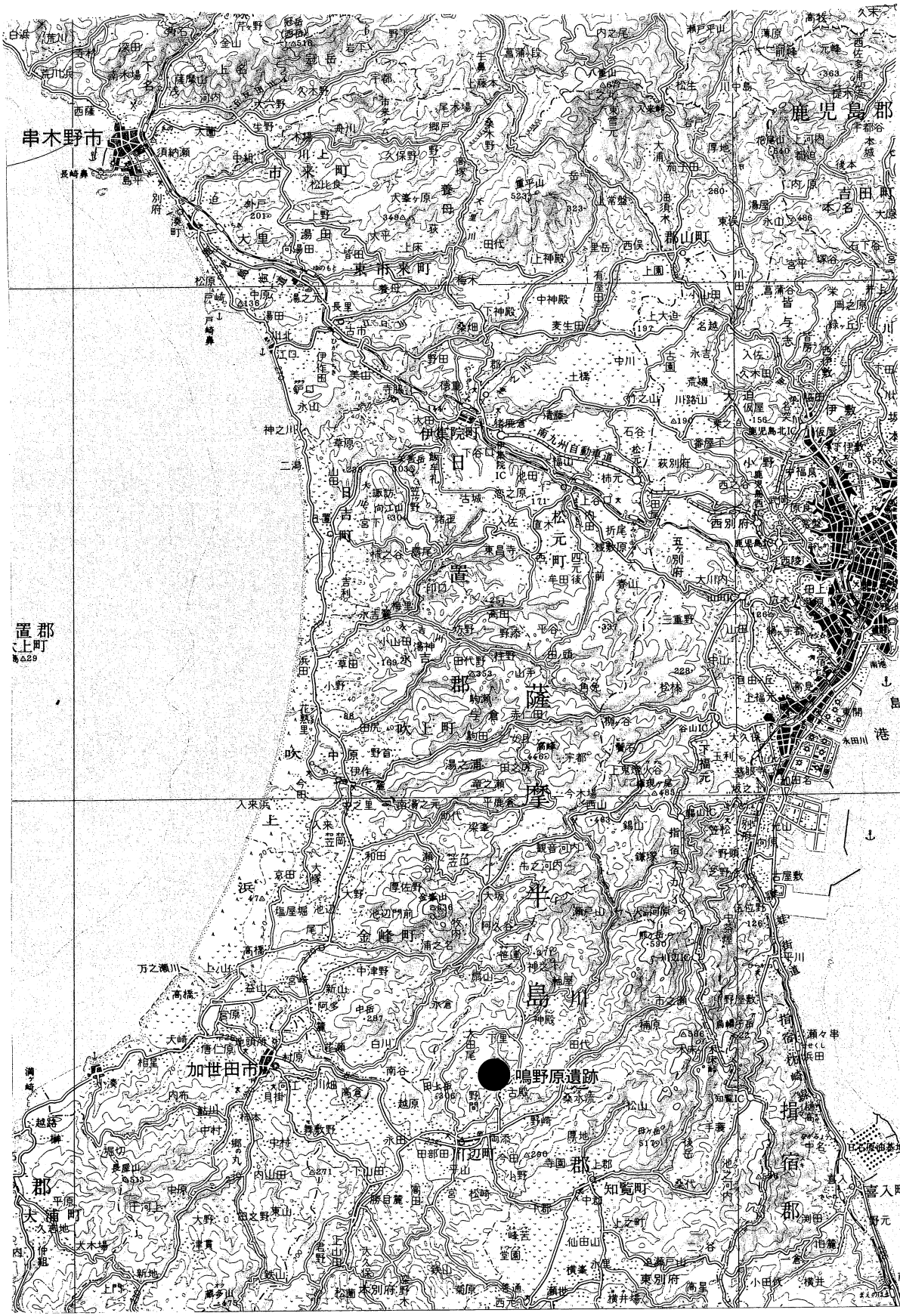
この発掘調査に協力をいただいた川辺町教育委員会社会教育課、加世田土木事務所を始めとする関係機関と、発掘調査していただいた地元作業員の皆様に心から感謝申し上げます。

平成14年12月

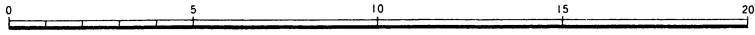
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 井 上 明 文

報告書抄録

ふりがな	なきのはらいせき							
書名	鳴野原遺跡							
副書名	県道鹿児島川辺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	47							
編著者名	堂込秀人							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	2002年12月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
なきのはらいせき 鳴野原遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かわなべちょう 川辺町 こでんなきのはら 神殿鳴野原	46345	124	31° 24′ 38″	130° 24′ 50″	確認調査 2000年1月24日 ～2月9日 (13日間) 本調査 2000年9月4日 ～9月20日 (10日間)	104.6 720	県道改良
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
鳴野原遺跡	伐採場跡	縄文時代早期				石坂式土器・塞ノ神式土器・石斧片		



1 : 200,000



第1図 遺跡の位置

例 言

- 1 この報告書は、県道鹿児島川辺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は県土木部（道路維持課）の依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査について、川辺町教育委員会や加世田土木事務所の協力を得た。
- 4 発掘調査における測量・実測・写真撮影は、各年度の発掘調査担当者が行った。
- 5 本書掲載の測量図、出土遺物の実測図作成、及び浄書は、堂込秀人が行なった。
- 6 現場写真の現像、遺物の写真撮影は、本センター福永修一が行なった。
- 7 遺物番号は、本文及び挿図・図版の番号と一致する。
- 8 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
- 9 本書の執筆・編集は堂込がおこなった。
- 10 本遺跡の出土遺物は県立埋蔵文化財センターが一括して保管し、一部は鹿児島県上野原縄文の森展示館に展示し活用する予定である。

目 次

序 文	
報告書抄録	
例 言	
第 I 章 調査の経過と組織	1
第 1 節 調査に至るまでの経緯	1
第 2 節 調査の組織	1
第 3 節 調査の経過（日誌抄）	3
第 II 章 遺跡の位置と環境	4
第 1 節 周辺の遺跡と歴史環境	4
第 2 節 土層	8
第 III 章 発掘調査	11
第 1 節 確認調査の概要	11
第 2 節 本調査の概要	11
第 3 節 出土遺物	18
1 土 器	18
2 石 器	18
第 IV 章 まとめにかえて	18

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡の位置	
第 2 図 遺跡の位置及び周辺の遺跡	6
第 3 図 遺跡の土層	8
第 4 図 トレンチ配置図と遺跡範囲	9
第 5 図 本調査区	10
第 6 図 遺物出土状況	12
第 7 図 出土土器（1）	13
第 8 図 出土土器（2）	14
第 9 図 出土土器（3）	15
第 10 図 出土石器（1）	16
第 11 図 出土石器（2）	17

表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表	7
第2表	出土土器観察表	19
第3表	石器計測表	20

図 版 目 次

図版1	遺跡遠景・本調査区全景	21
図版2	確認調査－3トレンチ・5トレンチ・5トレンチ土層	22
図版3	確認調査－6トレンチ・7トレンチ・8トレンチ	23
図版4	確認調査－9トレンチ・9トレンチ拡幅部分遺物出土状況・10トレンチ	24
図版5	本調査ベルトコンベア設置状況・発掘作業清掃状況・発掘作業状況	25
図版6	遺物出土状況	26
図版7	遺物出土状況（2・44・集中区）	27
図版8	出土土器（1）（1～7）	28
図版9	出土土器（2）（8～21）	29
図版10	出土土器（3）（22～42）	30
図版11	出土石器（4）（44～53）	31
図版12	出土石器（5）（54～59）	32

第 I 章 調査の経過と組織

第 1 節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県土木部河川課・道路維持課は県道鹿児島川辺線改良工事を計画し、工事地区内の埋蔵文化財の有無について県教育委員会文化財課（以下文化財課）に照会した。これを受けて文化財課は平成10年度に分布調査を実施し、鳴野原遺跡の所在を確認した。この結果に基づき、鹿児島県土木部河川課（加世田土木事務所ダム建設課）・文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下埋蔵文化財センター）との間で、埋蔵文化財の保護と事業の推進に係る協議が重ねられ、事業実施前に遺跡の範囲・性格などを把握するための確認調査を実施することとなった。確認調査は約5,600㎡を対象として平成12年1月24日から2月9日（実働13日間・確認調査面積104.6㎡）に実施し、工事区内の720㎡について遺物包含層が存在することを確認した。

この結果をもとに遺跡の取り扱いについて県土木部・文化財課・埋蔵文化財センターの三者で協議を行い、埋蔵文化財の保護と事業の推進を図るため事業着手前に本調査を実施することとなった。調査は埋蔵文化財センターにより、平成12年9月4日から9月20日までの実働10日間で実施した。

第 2 節 調査の組織

確認調査 平成11年度

事業主体	鹿児島県土木部河川課（加世田土木事務所ダム建設課）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉 永 和 人
調査企画者	〃	次 長 兼 総 務 課 長	黒 木 友 幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸 崎 勝 洋
	〃	課長補佐兼第1調査係長	新 東 晃 一
	〃	主任文化財主事	中 村 耕 治
調査担当者	鹿児島県教育庁文化財課	文 化 財 主 事	倉 元 良 文
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	〃	西 村 喜 一
調査事務担当者	〃	総 務 係 長	有 村 貢
	〃	主 事	溜 池 佳 子

本調査 平成12年度

事業主体	鹿児島県土木部道路維持課（加世田土木事務所道路維持課）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井 上 明 文
調査企画者	〃	次 長 兼 総 務 課 長	黒 木 友 幸
	〃	調 査 課 長	新 東 晃 一

	〃	調 査 課 長 補 佐	立 神 次 郎
	〃	主任文化財主事兼第1調査係長	青 崎 和 憲
	〃	主 任 文 化 財 主 事	中 村 耕 治
調査担当者	〃	文 化 財 主 事	堂 込 秀 人
	〃	〃	大久保 浩 二
調査事務担当者	〃	総 務 係 長	有 村 貢
	〃	主 事	溜 池 佳 子

報告書作成事業

平成14年度 報告書作成事業

事業主体 鹿児島県土木部道路維持課（加世田土木事務所道路維持課）

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井 上 明 文
調査企画者	〃	次 長 兼 総 務 課 長	田 中 文 雄
	〃	調 査 課 長	新 東 晃 一
	〃	調 査 課 長 補 佐	立 神 次 郎
	〃	主任文化財主事兼第1調査係長	池 畑 耕 一
	〃	主 任 文 化 財 主 事	中 村 耕 治
報告書作成担当者	〃	文 化 財 主 事	堂 込 秀 人
調査事務担当者	〃	総 務 係 長	前 田 昭 信
	〃	主 査	栗 山 和 巳

発掘調査作業員

赤峰明生・赤峰クニ子・鯨坂ミチヨ・有村治・井料よね子・内門兼昭・宇都憲一・大倉野和子
 大藪清子・大藪文蔵・大渡寿一・掛橋千恵美・五反田景春・汐満留美子・鳥越信広・中迎孝市
 中迎タケ子・中島春美・馬場道春・原之蘭三男・深野木義満・牧田政任・用貝重雄・吉澤勇夫
 吉澤裕子・若松京子

整理作業作業員

前田裕子・湯之上さゆり・網屋にしき

第3節 調査の経過（日誌抄）

確認調査

平成12年1月24日（月） ～28日（金）	オリエンテーション。1～4トレンチ設定，重機による表土剥ぎ後掘り下げ。排土置き場がなく，排土処理に重機をつかう。
1月31日（月） ～2月4日（金）	5～9トレンチ設定。1～4トレンチ掘り下げ終了。清掃・写真。1～4トレンチは遺物・遺構検出せず。トレンチ位置図作成。
2月7日（月） ～9日（水）	10トレンチ設定。5・9・10トレンチで遺物が出土した。重機によるトレンチ埋めもどし。器材撤収。

本調査

平成12年8月28日（月）	プレハブ設置場所の整地作業。現道部分の調査のため，発掘調査区に鉄パイプで安全柵を設置，迂回等の案内板の設置等を行う。アスファルトおよび路盤の砂利等の除去。
8月30日（水） ～9月1日（金）	表土剥ぎ，プレハブ設置及び電話工事。
9月4日（月） ～9月8日（金）	オリエンテーション。ベルコン設置。包含層（縄文時代早期層）の掘り下げ。石坂式土器及び石斧等出土。重機による排土搬出。
9月11日（月） ～9月12日（火）	包含層（縄文時代早期層）の掘り下げ。 13・14日は雨天のため現場作業できず。
9月18日（月） ～9月20日（水）	包含層（縄文時代早期層）の掘り下げ。南側で旧石器時代相当層の確認を行う。基盤は河岸段丘形成層で，土壌はシラスの2次堆積がその上から発達する。

整理作業・報告書作成

平成14年4月	図面確認，遺物水洗・注記・接合。
5月	報告書掲載遺物の選別。土器の拓本・実測，石器の一部の実測委託準備，石器実測図校正作業。遺構写真等の図版作成。
6月	土器レイアウト，石器委託終了・納品・検収。
9月	石器レイアウト，出土状況等の図面作成。遺物写真撮影。
10月	原稿執筆。

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 周辺の遺跡と歴史環境

川辺町は薩摩半島の南部（南薩）のほぼ中央にあつて、北は鹿児島市及び金峰町、東は知覧町、南は枕崎市、西は加世田市に隣接しており、海はもたず山懐に抱かれた町である。薩摩半島のほぼ中央部に薩南山地が走り、東は喜入・知覧、西は加世田へと延びる谷あいの発達した南薩地方で最大規模の盆地で、南側は400m級の山が取り囲んでいる。その中を県下第4位の長さの万之瀬川がうねりながら流れ東シナ海へ注いでいる。

本遺跡は盆地の北側にある標高115mの台地上に位置し、東は万之瀬川、西には万之瀬川の支流である神殿川が北から南に流れている。また北東1kmほどのところに清水磨崖仏がある。「鳴野原」の地名については、「この地は古川辺家兄弟がささいな事から差違え、兄弟相果てたため鳴野原と唱えたといわれる。」との伝承がある¹⁾。また応永24年（1417）に奥州家島津久豊と総州家島津久林・伊集院頼久とのあいだで、平山城と松尾城周辺で一大合戦があり、この地が古戦場といわれている。こうしたことが呼称に反映されたことは十分考えられる。

川辺町の遺跡の所在については、考古学の有志による分布調査の成果が大きい²⁾。日置郡・加世田市・川辺郡などの薩摩半島で分布調査を行い、埋蔵文化財保護に大きな役割を担った。川辺町では田部田の廻り淵遺跡で曾畑式土器を中心に深浦式土器が採集され、ムッタンシマ遺跡では塞ノ神式土器が採集されている。小崎遺跡では押型文土器と貝類・獣骨が採集された。

さて鳴野原遺跡のある台地と同様の台地縁辺部には堂園遺跡（2）・草葉遺跡（8）・大田尾遺跡（9）・木場田遺跡（14）・東ヶ迫遺跡（15）のように縄文時代の遺跡が分布し、低地には雲朝寺跡（4）・桜馬場遺跡（5）・北中横遺跡（6）・川辺氏居館跡（7）・龍泉寺跡（16）・金勝寺跡（17）などの古墳時代から中世の遺跡が分布する。その中間の低位段丘には横堀遺跡（3）・中須遺跡（10）・神殿小上（27）・上ノ原遺跡（28）・山神迫遺跡（34）・平野上遺跡（35）・大丸遺跡（36）など古墳時代の遺跡が分布する。発掘調査された遺跡は、旧石器時代では宮ノ上遺跡（11）で縦長剥片類が400点近く出土し、荻久保遺跡（30）ではナイフ形石器・剥片・チップが出土している³⁾。縄文時代草創期では、遺跡地図上にはないが上山田鷹爪野遺跡で舟形配石炉と隆帯文土器が出土し、また縄文時代早期の前平式土器の時期の石器製作所と推定されている8基の竪穴状遺構が検出されている⁴⁾。宮ノ上遺跡と荻久保遺跡では、縄文時代早期の吉田式土器・前平式土器・石坂式土器など貝殻円筒土器群と石器等が出土している。

縄文時代後期の遺跡として知られる田中堀遺跡では上村純一氏が中心となり、1981・84・85年に小規模ながら確認調査を継続的に行った⁵⁾。縄文時代後期前半の貯蔵穴が検出され、縄文時代中期の春日式土器・深浦式土器・船元式土器と縄文時代後期の指宿式土器・市来式土器が出土し、石斧・石鏃・磨石・石皿なども出土した。また、農業基盤整備事業に伴って平成7年度に供養塚遺跡が、平成8年度には矢倉ヶ迫遺跡が確認調査された⁶⁾。矢倉ヶ迫遺跡では、縄文時代早期の桑ノ丸式土器や石坂式土器などと楔形石器・ハンマーストーンなどの加工具を中心とした石器が出土している。平成12年度には背野平遺跡・塘池ノ上遺跡（33）が確認調査され、平成13年度には塘池ノ上遺跡の農道部分の全面調査と津フジ遺跡などの確認調査がなされた。塘池ノ上遺跡では縄文時代早期・古

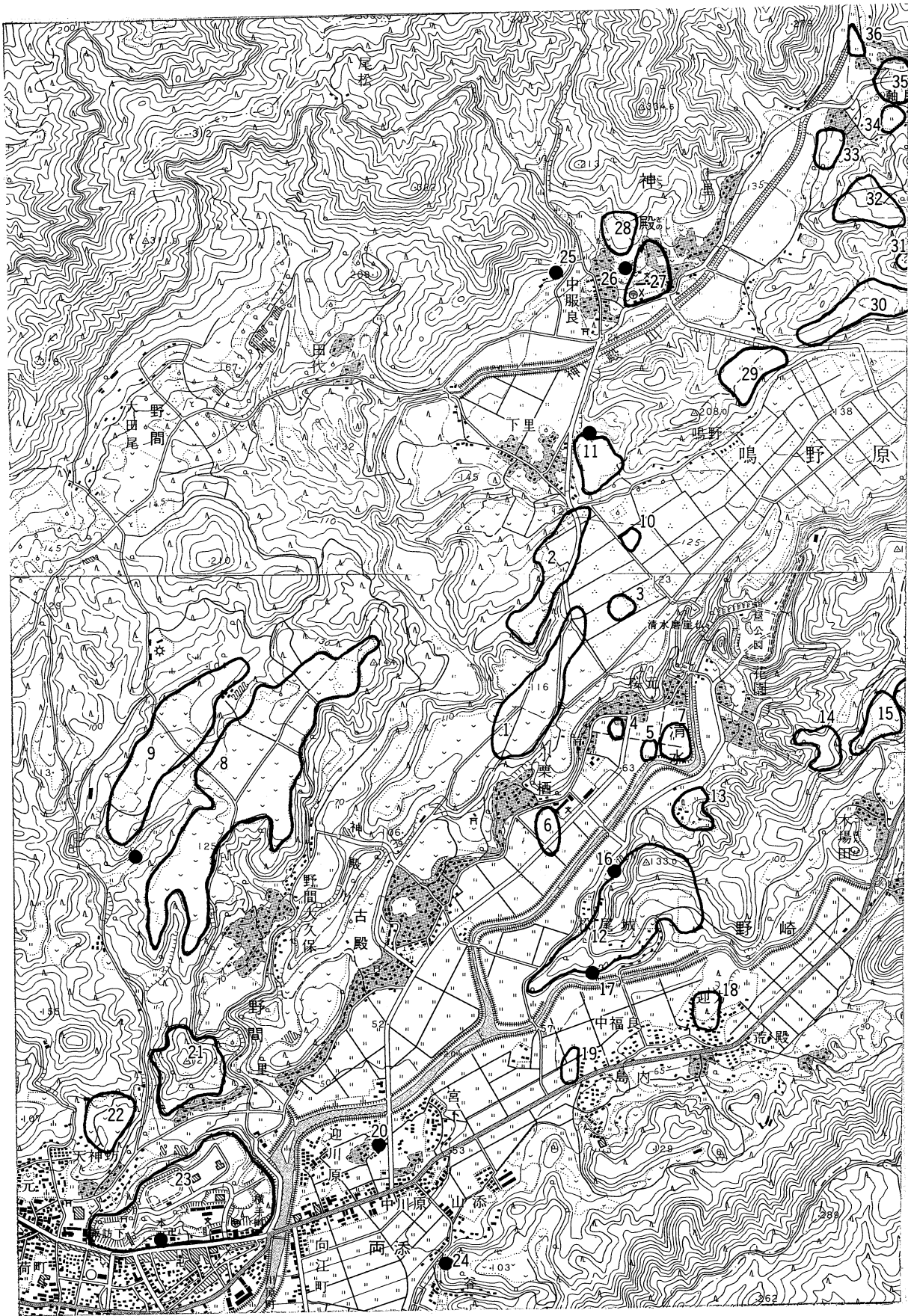
墳時代の遺物が出土している。これらはほとんど台地部分で、旧石器時代や縄文時代が明らかにされようとしている。弥生時代や古墳時代以降については、調査例が少なくお不詳であるが、最近万之瀬川治水対策事業に伴う調査で、平成13年度に南田代遺跡で縄文時代前期～晩期と弥生時代の遺物が出土し、古市遺跡では弥生時代前期の竪穴住居跡2基と古墳時代の竪穴住居跡5基が検出されている。今後詳細については、報告書で明らかにされていくであろう。

中世では河邊氏の川辺氏居館跡(7)について、なお発祥については諸説あるが、薩摩(伊作)平氏に連なるとされ、平安時代後期に同地を支配した。ただし支配は長くは続かず、鎌倉時代後期には河邊郡は得宗領となっており、これは承久の乱(1221)で河邊郡司の河邊久道が改易されたところまでさかのぼる可能性が強い。ただし郡司職を失ったものの、旧領域に居続けたことは、清水磨崖仏群中の銘文に永仁4年(1296)のものがあることからうかがわれる。その後は年月の推移とともに衰えていったようで、南北朝期の興国3年(1243)の史料以後は史料へはあらわれなくなる。その後河邊郡は千竈氏が室町時代まで在地領主として勢力を維持していたものと考えられている⁷⁾。

平山城(23)は昭和58年に都市公園整備事業に伴って発掘調査がされた⁸⁾が、すでにシラス採取や個人の宅造などでかなりの削平をうけており、その後も開発で現状は惨憺たる状況である。14世紀末から15・16世紀を中心とする遺物が出土しており、史料としては明徳4年(1363)島津伊久の居城として川辺城が出てくる。鎌倉幕府滅亡後の河邊郡の地頭職には島津氏が復権したと考えられている。南北朝時代以降島津氏の総州家から奥州家へ、伊集院家から総州家へ、その没落後は伊作家へ、そして薩州家、相州家と移動するといわれる。これらの領主権をめぐる争いの中で中世山城を位置付け直すことも必要であろう。中世・近世については、考古学的には不明な点が多く、河邊氏居館跡等の中世遺跡の調査が今後望まれる。

《参考・引用文献》

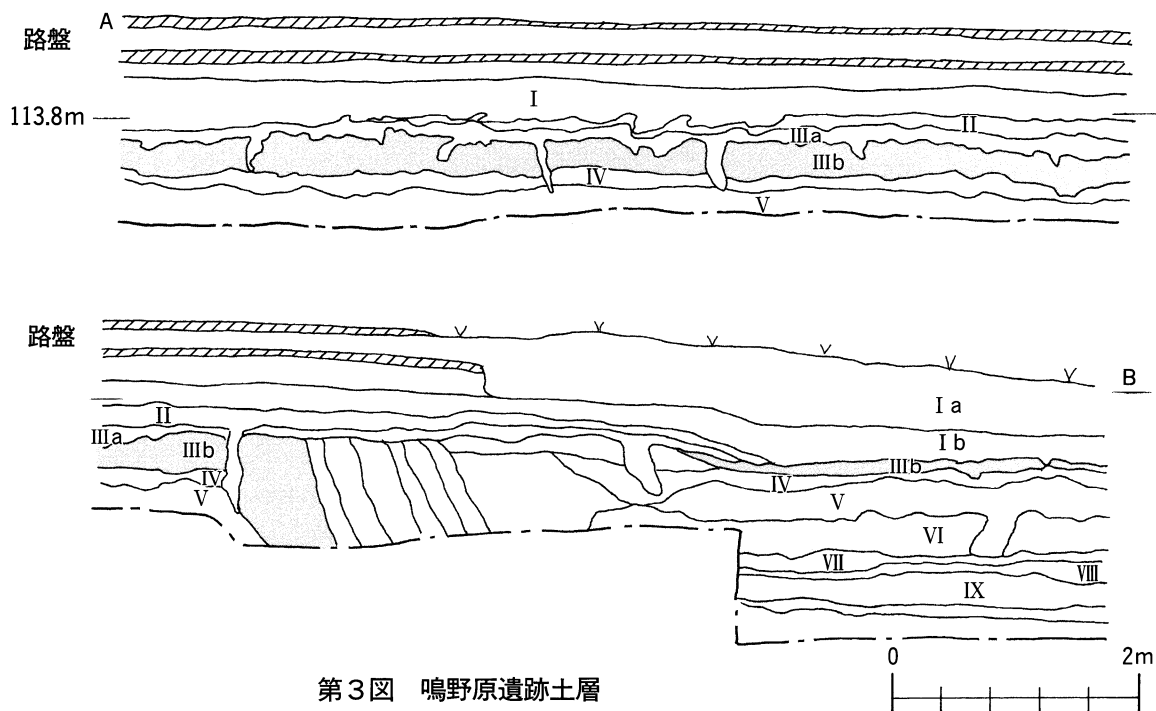
- 1) 川辺町『川辺町郷土史・追補』1997
- 2) 有元彰順・本田道輝・東和幸・上田耕「薩摩半島の考古学(1)」『鹿児島考古』第17号 1983 鹿児島県考古学会
上田耕・坪根伸也・栗畑光博・田中芳人・東和幸「薩摩半島の考古学(2)」『鹿児島考古』第21号 1987 鹿児島県考古学会
西中川駿・東和幸「薩摩半島の考古学Ⅲ－川辺町小崎遺跡－」『鹿児島考古』第24号 1990 鹿児島県考古学会
- 3) 1)と同じ
- 4) 川辺町教育委員会『鷹爪野遺跡』川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1994
川辺町教育委員会『鷹爪野遺跡』川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 1998
- 5) 1)と同じ
- 6) 川辺町教育委員会『矢倉ヶ迫遺跡』川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 1999
- 7) 五味克夫「第2節 中世の河邊郡と河邊氏」『清水磨崖仏群』川辺町文化財調査報告(4) 1997 川辺町教育委員会
- 8) 川辺町教育委員会『平山城跡』川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1984



第2図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 1/25,000

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	鳴野原	川辺町神殿鳴野原	台地	縄文		平成10年土木分布
2	堂園	川辺町神殿	台地	縄文		平成13年分布調査
3	横堀	川辺町神殿横堀	台地	古墳	成川式土器	平成6年サン・オーシャン分布調査
4	雲朝寺跡	川辺町清水桜元	低地			
5	桜馬場	川辺町清水桜馬場	低地	古墳～中世(鎌倉)	成川式土器	青磁・白磁
6	北中横	川辺町清水旧北中横	低地	平安～中世(鎌倉)	土師器・青磁・白磁	平成10年農政分布
7	川辺氏居館跡	川辺町清水小栗栖	低地			(町指定) 昭和33
8	草葉	川辺町野間草葉 ほか	台地	縄文～古墳		平成10年農政分布
9	大田尾	川辺町清水大田尾	台地	縄文(後)	市来式土器	吹上高校所蔵
10	中原	川辺町神殿中須	台地	古墳	成川式土器	平成6年サン・オーシャン分布調査
11	宮ノ上	川辺町神殿宮ノ上	丘陵	旧石器～縄文	前平式土器 指宿式土器	
12	松尾城跡	川辺町野崎松尾城	丘陵	中世(鎌倉)	空堀・曲輪	(町指定) 昭和33
13	宝光院跡	川辺町清水宇都	山麓緩斜面	中世(鎌倉)～近世	礎石一部残存	(町指定) 昭和33
14	木場田	川辺町清水木場田	台地	縄文		
15	東ヶ迫	川辺町清水東ヶ迫 3694-2	台地	縄文・古墳		
16	龍泉寺跡	川辺町野崎北原	低地			
17	金勝寺跡	川辺町野崎松尾城下	低地			
18	野崎陣跡	川辺町野崎陣平	台地	中世		
19	馬場田	川辺町	台地	中世		平成13年分布調査
20	矢掛松	川辺町両添宮下	低地			(町指定) 昭和42
21	野間陣之尾城跡	川辺町野間陣之尾	台地	中世		
22	馬越原	川辺町平山馬越原	台地	縄文・中世	前平式土器・土師器	平成8年確認調査
23	平山城跡	川辺町平山天神	河岸段丘	中世・近世	青磁, 染付等	(町) 昭和42年度 確認調査
24	向城寺跡	川辺町両添山添	低地			
25	長江庵跡	川辺町神殿園田山下	山麓緩斜面			
26	端朝寺跡	川辺町神殿	山麓緩斜面			
27	神殿小上	川辺町神殿小学校上	扇状地	古墳	成川式土器	
28	上ノ原	川辺町神殿上ノ原	台地	古墳	成川式土器	
29	法師原	川辺町神殿法師原	台地	弥生	弥生土器	
30	萩久保	川辺町神殿萩久保	台地	縄文	土器片散布	平成元～3年 発掘調査
31	高船山頂	川辺町神殿高船	山頂緩斜面	縄文(早)	前平式土器 集石	
32	折戸平	川辺町神殿折戸平617	台地	縄文	土器片散布	
33	塘池上	川辺町下山田塘池上	台地	縄文(早) 古墳	弥生土器 散布・石皿	平成12年発掘調査
34	山神迫	川辺町神殿山神迫	台地	古墳	成川式土器	平成6年サン・オーシャン分布調査
35	平野上	川辺町神殿平野上	台地	古墳	成川式土器	
36	大丸	川辺町神殿大丸	台地	古墳	成川式土器	平成6年サン・オーシャン分布調査



第3図 鳴野原遺跡土層

第2節 土層

河岸段丘上に立地する鳴野原遺跡は、入戸火砕流堆積物を基盤層として、その上に河川による堆積層いわゆる段丘堆積物が堆積する。清水磨崖は入戸火砕流の弱溶結凝灰岩に彫り込んだものである。その上の段丘堆積層は下部では軽石質の砂礫層で、上部には細かい砂層とシラス起源と考えられる細かい土層が互層となって堆積している。その段丘堆積物の上にローム層が形成されそれ以後は安定した土壤形成がなされたものと考えられる。

第3図の遺跡土層はNo52～No53の間の16mの部分の土層である。II層を含めて、畑地耕作され、表土を形成しており、それらを削り込んで道路がつけられたため、路盤がいくつか形成されている。以下層順に述べる。

I層 表土 灰褐色土層

II層 黒褐色土層

III層 III a層 暗黄褐色土層 パサパサのアカホヤ火山灰層で土壌化したものである。

III b層 黄褐色土層 アカホヤ火山灰の1次層と幸屋火砕流堆積物からなるもので、約6,400年前に比定される。

▲IV層 青灰色土層 固くしまった層で下部から塞ノ神式土器が出土した。

▲V層 黒褐色粘質土層 石坂式土器が出土した。

VI層 黄白色軽石層 「薩摩」といわれる降下軽石層で、約11,500年前に比定される。

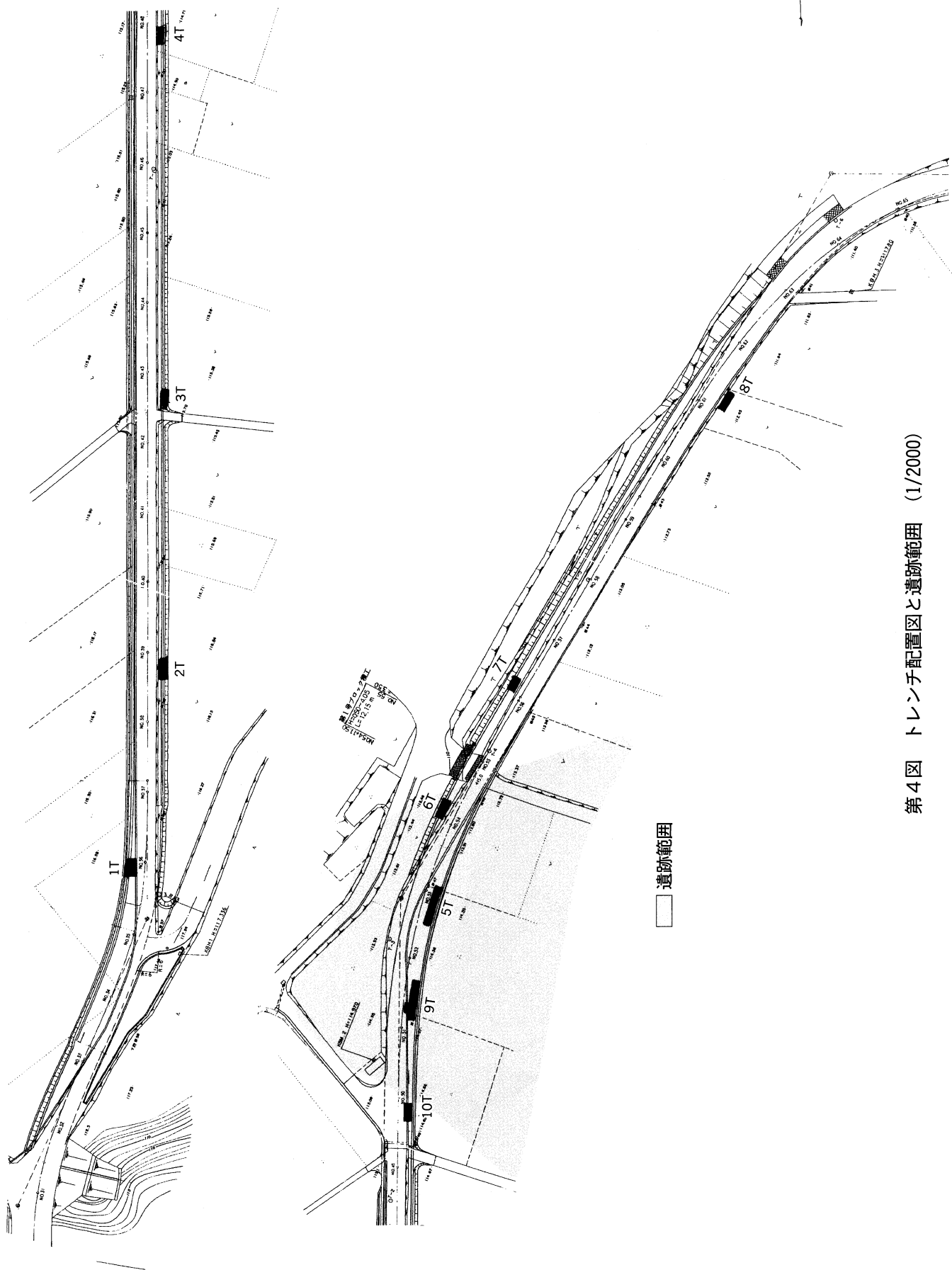
VII層 黒褐色粘質土層 固くしまった層

VIII層 暗赤褐色粘土層 いわゆる「チョコ」層といわれる層である。

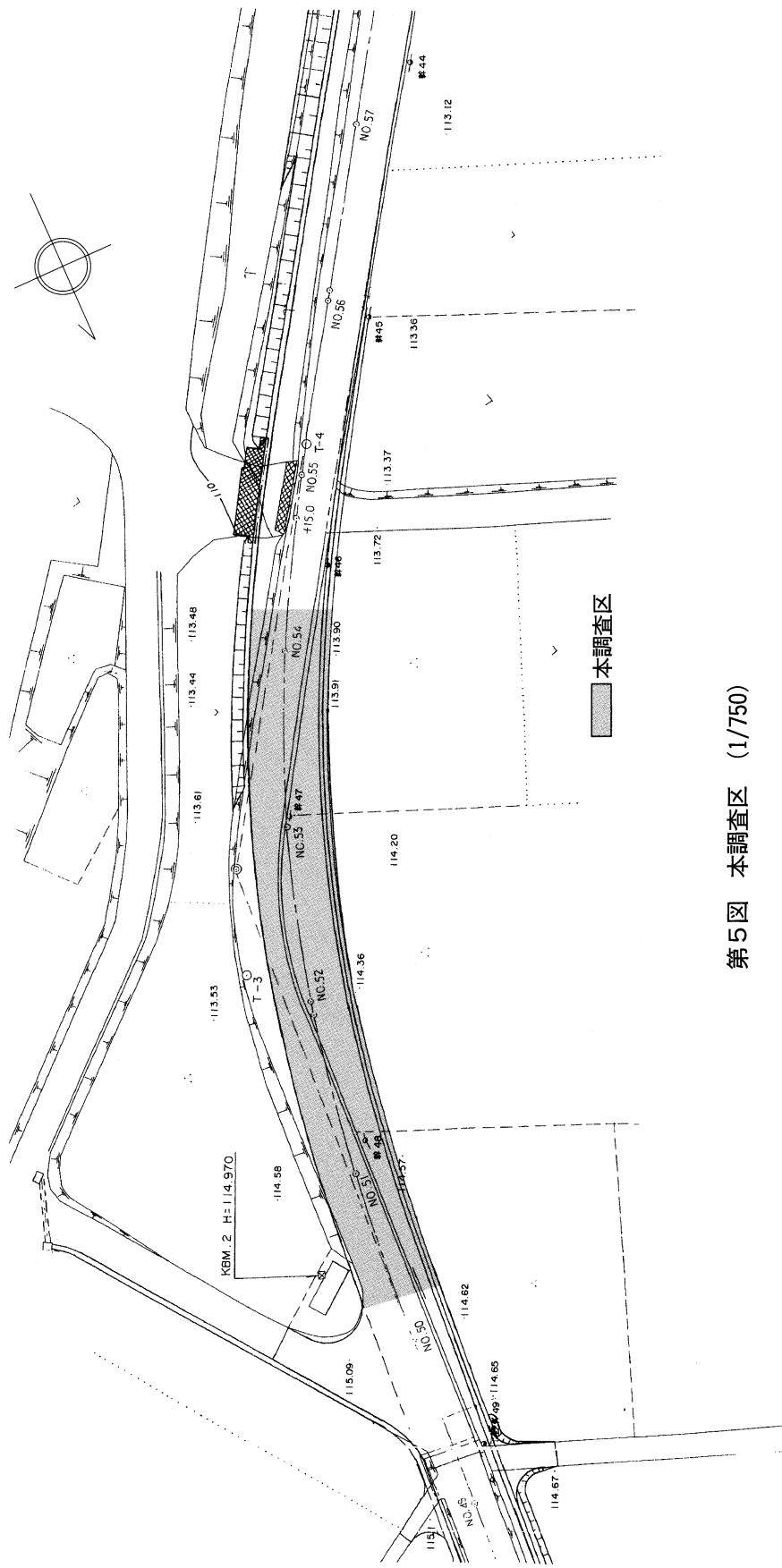
IX層 淡褐色粘質土層 シラス起源のローム層である。

X層 暗褐色粘質土層 シラス起源のローム層である。

※▲は包含層



第4図 トレンチ配置図と遺跡範囲 (1/2000)



第5図 本調査区 (1/750)

第三章 発掘調査

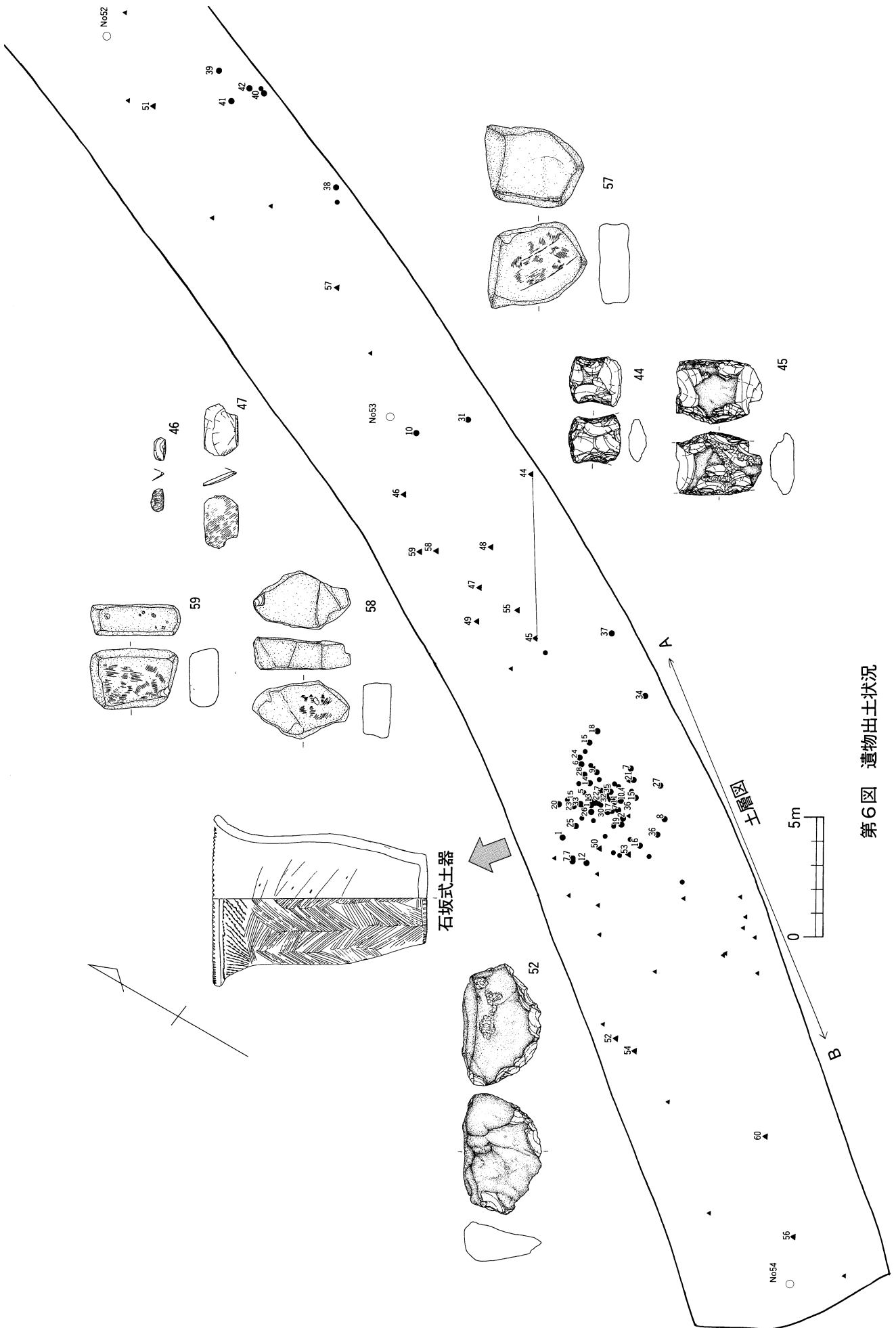
第1節 確認調査の概要（第4図）

鳴野原遺跡の調査対象地は、県道知覧川辺線を川辺町両添から北上し、神殿小学校を見下ろす台地沿いの道路から、台地を横断して川辺ダムへ向かう道路の、標高115m弱の台地の部分である。ほぼ平坦の畑地帯となっており、茶畑が中心である。北の川辺ダム側から道路の拡幅部分に順次約40m～60m間隔でトレンチを配していった。分布調査では古墳時代土器片を採集していたが、古墳時代包含層はほとんど畑地造成および道路路盤置き換えのため残存していなかった。表土およびⅢ層の一部については、重機により掘り下げた。拡幅部分が狭く、茶畑が中心であり排土の置き場がなく、調査中の排土については、一部持ち出してまた埋めるという作業も必要であった。アカホヤ層を挟んで縄文時代の調査が中心となったが、5トレンチで縄文時代早期の土器と磨石が出土した。このため縄文時代早期の遺物が出土した5トレンチ周辺に9トレンチ・10トレンチを設定し、さらに遺跡範囲を絞り込んだ。各トレンチはⅢ層以下は安定した土層堆積をなしており、9トレンチでは縄文時代早期の遺物が出土し、10トレンチと6トレンチでは遺物・遺構は検出されなかった。そこで10トレンチと6トレンチを目安とした範囲の720㎡を遺跡範囲と確認した。確認調査の縄文時代の遺物は縄文時代早期の塞ノ神式土器と磨石が出土した。

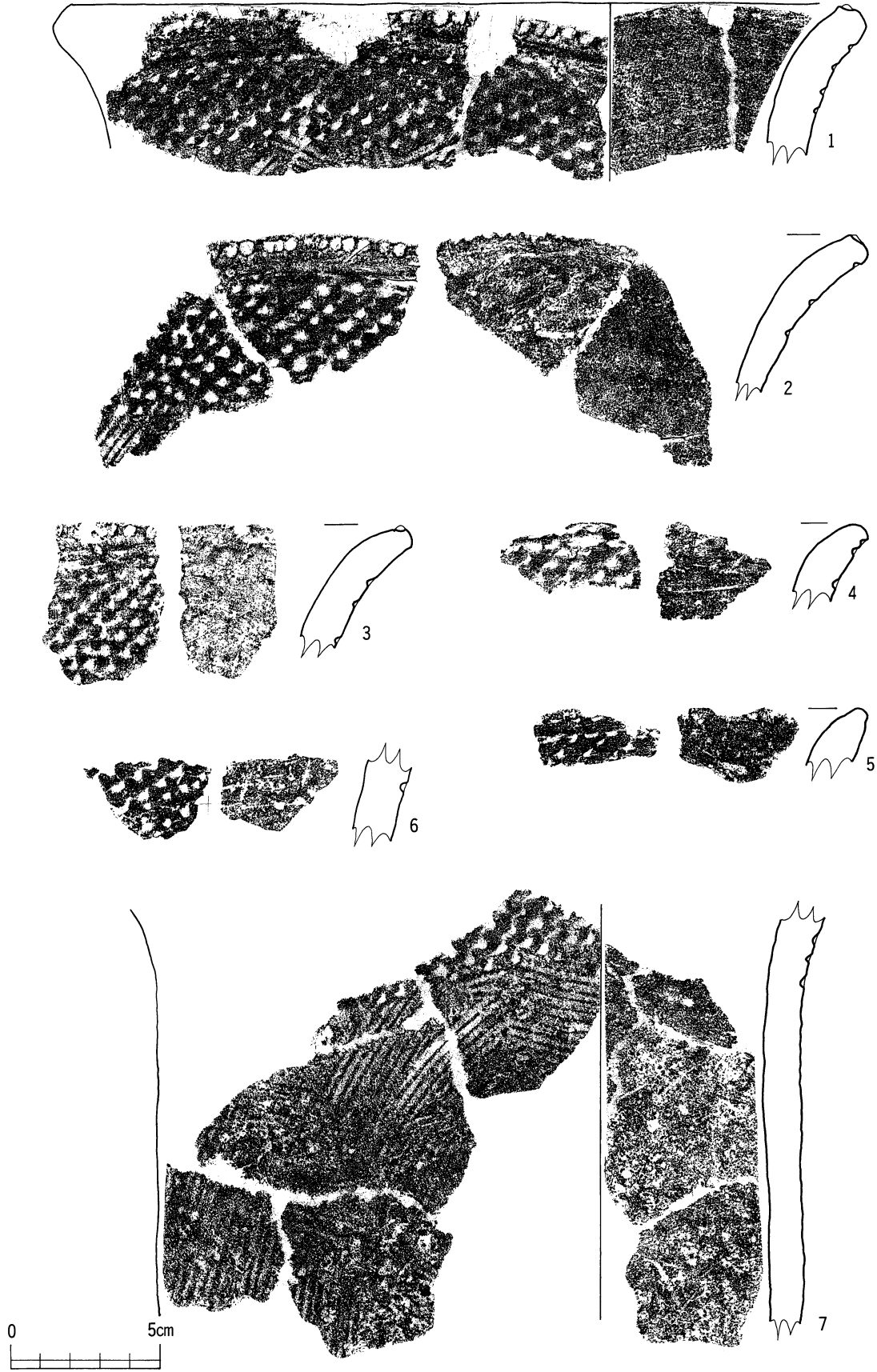
第2節 本調査の概要（第5図）

本調査は工事区内のセンター杭No50～No54までの80m区間（720㎡）について調査対象とした。本調査区東側土層（第3図）では、Ⅱ層の黒褐色土層がわずかに残存しているが、トレンチ調査および表土剥ぎ取り時の立ち会いの結果、調査区の大部分については、畑地造成による削平ないしは道路建設時の路盤の置き換え等で、Ⅲ層のアカホヤ層上面まで削平されていた。現道部分の掘削が必要のため、工事は発注してもらい、アスファルト及び路盤の除去から業者へお願いした。それ以下の掘削は発掘調査のために、県立埋蔵文化財センターの方で業者と委託契約をむすんで行った。確認調査時には古墳時代の遺物・遺構は検出されなかったが、念のため立ち会いながら、重機により旧表土を剥ぎ取り、特にⅡ層の残存状況を見ながら、少しずつ掘り下げた。Ⅲ層上面で遺構がないことを確認後に、Ⅲ層を剥ぎ取り、Ⅳ層から人力により掘り下げを行った。その結果、Ⅳ層下部から塞ノ神式土器が出土し、Ⅴ層から石坂式土器が出土した。出土状況は、石坂式土器が第6図のようにほぼ中央部にかたまって出土し、塞ノ神式土器が調査区の北東側でおもに出土している。また石器は砥石を中心に石斧の破片や破損品が出土している。土器の集中区と、石器の集中区は近接しており、Ⅳ層内であり、出土遺物も同じレベルくらいであることから、同時期のものと判断する。全体にⅥ層を検出して発掘調査を終了した。

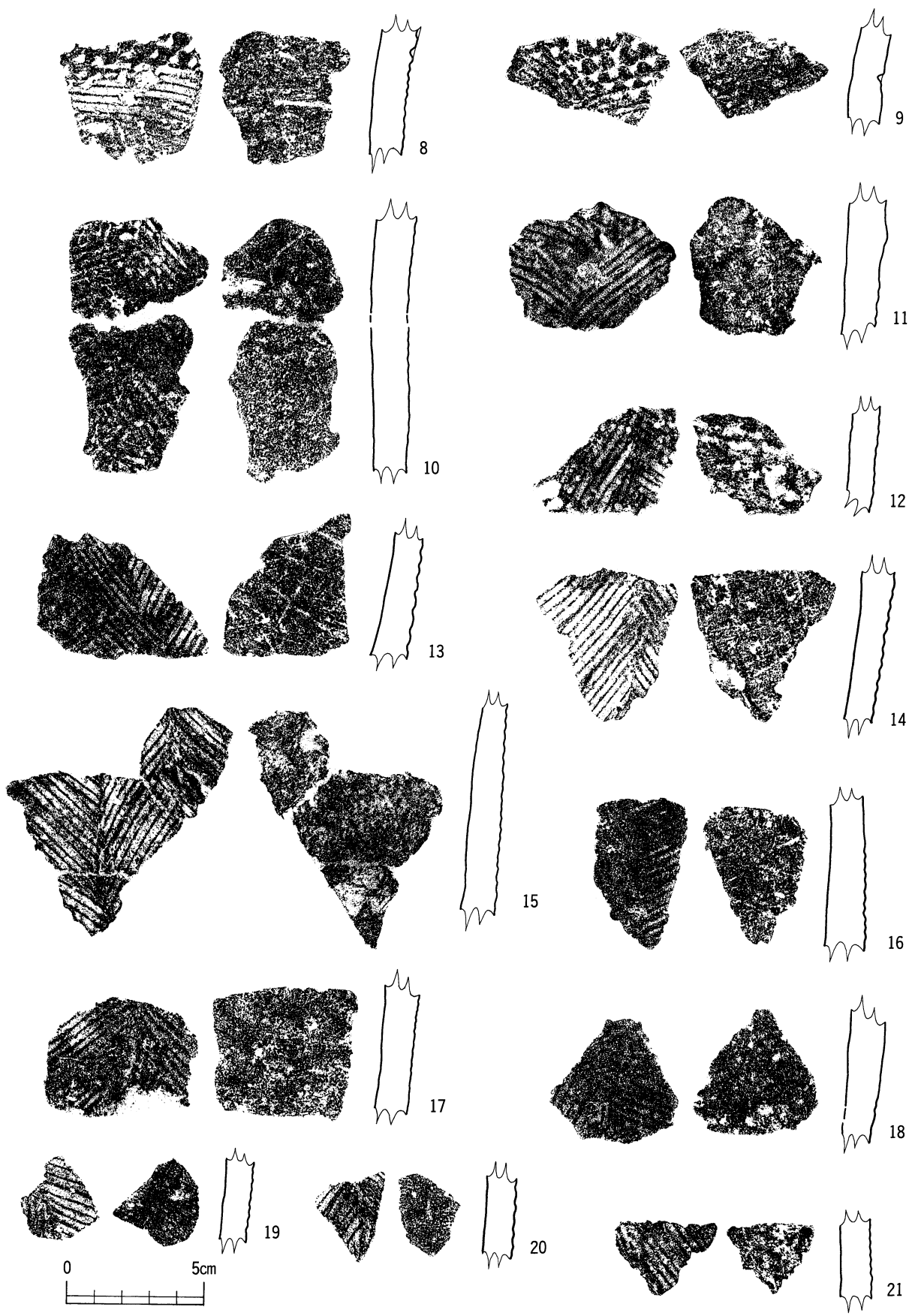
また土層横転で現れたⅨ層相当の土層からシルト質の残核が出土したため、2×5mの部分について、慎重に下層確認を行ったところ（一部が土層断面にかかる）、Ⅹ層下部からは水成堆積層が厚く堆積しており、旧石器時代の遺物・遺構は検出されなかった。シルト質の残核もローリングを受けており、流れ込みと判断した。さらに北側についても重機を用いて下層確認を行った。



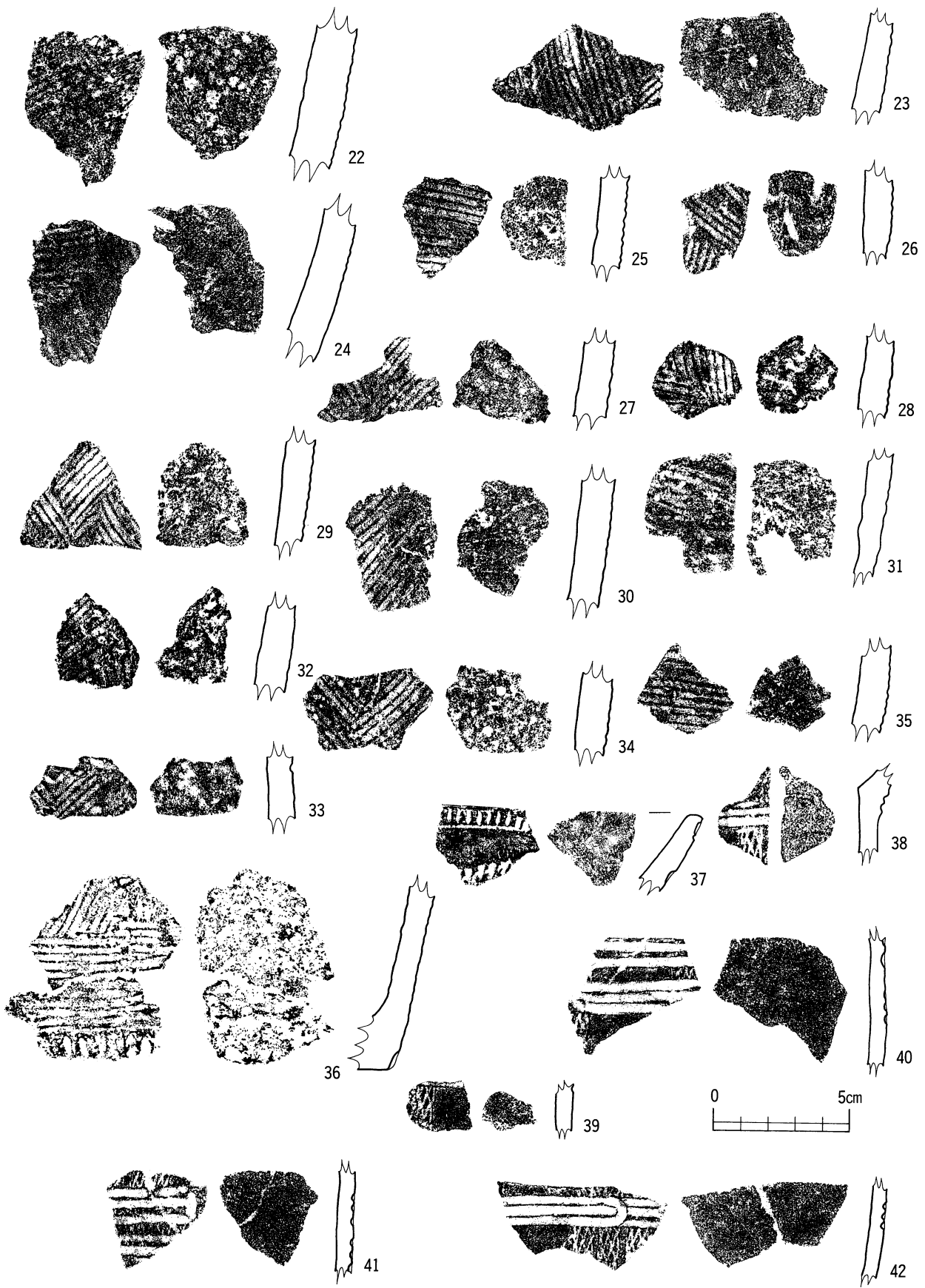
第6図 遺物出土状況



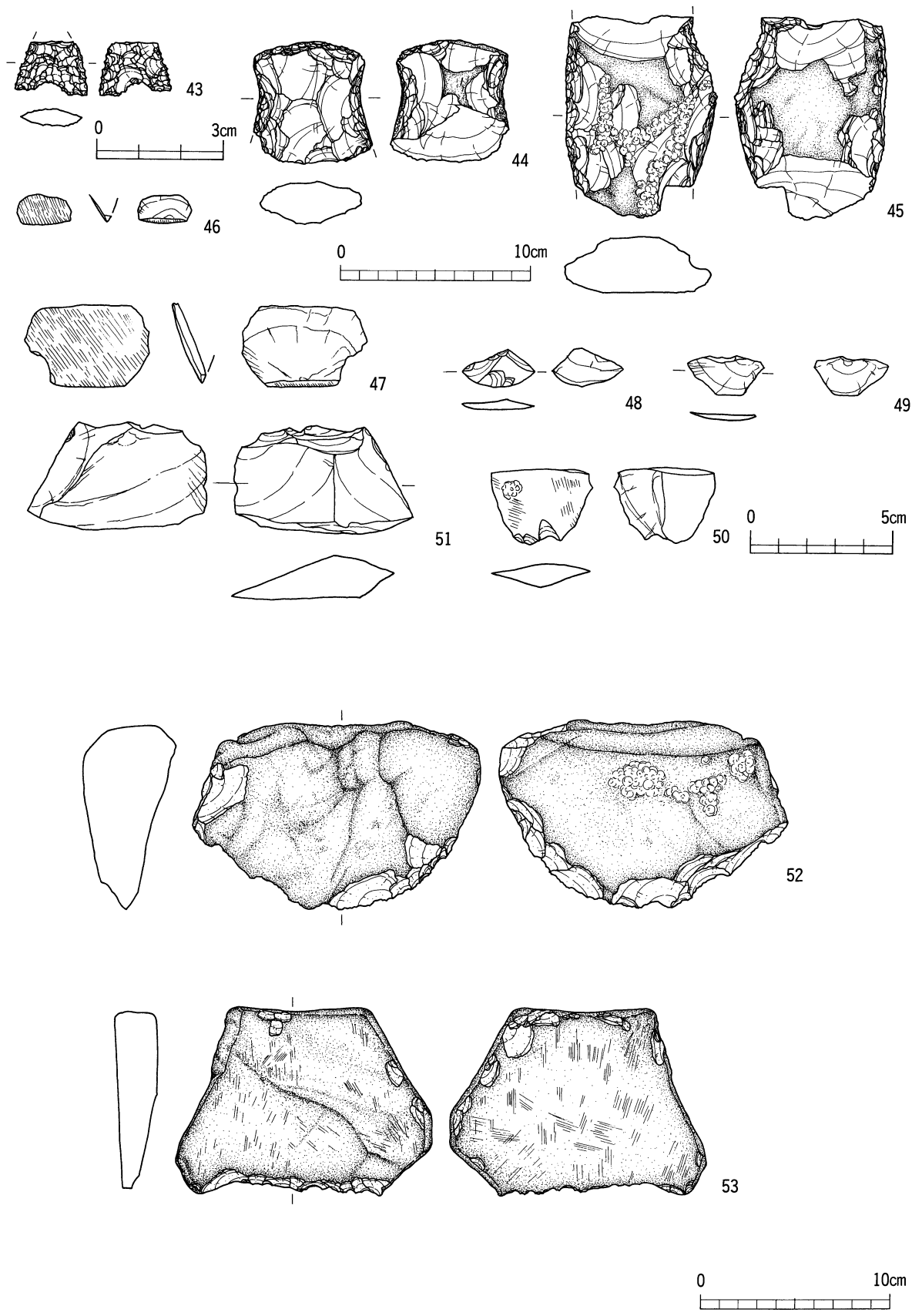
第7图 出土土器(1)



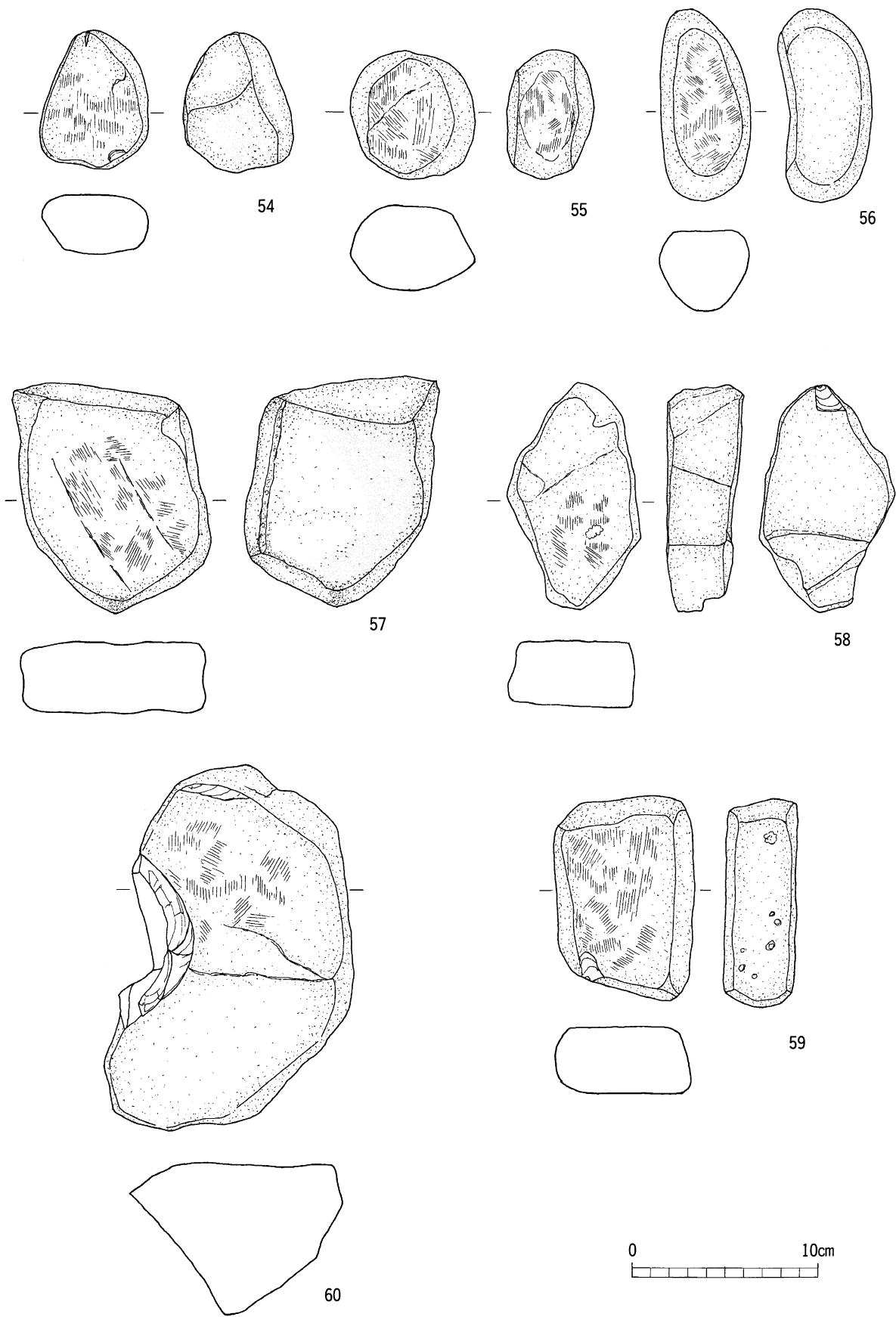
第8图 出土土器(2)



第9圖 出土土器(3)



第10图 出土石器(1)



第11图 出土石器(2)

第3節 出土遺物

1 土器 (第7図～第9図 1～42)

1～36の土器については、出土状況および土器の観察から同一個体の可能性が強い。口縁部が外反し、胴がやや膨らむ長い胴部に、平底の器形である。文様は口縁端部の内側に刻目があり、口縁部外側は貝殻腹縁の刺突が施され、頸部以下は貝殻条痕が綾杉状に文様の効果を出している。内側は工具によるナデで斜め方向へなであげられる。個別の土器についての説明は、土器観察表による。37～42は塞ノ神式土器である。37は口縁部で、口縁直下にへう状工具による連続刺突が施され、斜め方向に貝殻腹縁による連続刺突が施される。38～42は平行沈線に網目撚糸文が縦方向に施される。

2 石器 (第10図～第11図 43～60)

43は赤色チャートの石鏃で、先端部を欠損している。44は石斧の基部、45は石斧の胴部であり、44と45は接合できる。46・47は磨製石斧の刃部で、打撃により破損した際の欠落した刃部破片である。48・49は剥片、50は一面に研磨面があり磨製石斧の一部分と考えられる。51は44～50と同一の石材で、打製石斧の破損品ないしは磨製石斧の未製品の破損品の可能性がある。52は平滑面と敲打面があり、一側縁に刃部を形成している。53は平坦面に細かい擦痕を残す平坦面があり、台形をなす長辺に片側からの剥離で刃部を作り出している。54～56は磨石である。57は砥石であり、研いだ使用痕跡が凹面となっている。裏面の平滑面は接地面のため摩耗した可能性がある。58～60は平坦面に擦痕を残す平滑面を有するもので、砥石とした。

第IV章 まとめにかえて

石坂式土器が第6図のようにほぼ中央部にかたまって出土し、その5、6m北側に砥石を中心に石斧の破片や破損品が出土している。石斧の破損品、刃部の破片及び剥片、砥石などこれらの石器はほぼ石坂式土器の時期と考えられる。砥石は磨製石斧の刃部の研ぎ直しに使われたものと考えられ、当時この周辺で伐採や木工作業が行われた可能性がある。また礫器についても、木工に使用された可能性がある。石斧が実際に使用された遺跡と見なすことができる。石斧については、他の石器と同じように、製作・所蔵・使用・廃棄といった時間的な推移が予想されるが、石斧についての使用場所は当然「ヤマ」であり、生活の場所とは異なるため、出土遺物は少なく、遺跡として把握されることは珍しい。石斧の使用・再利用・廃棄の様態を窺うことができる。石鏃については、末吉町土合原遺跡など製作跡が検出されつつあるが、石斧については、現在まで県内では知られていない。石斧のデポが国分市上野原遺跡・牧園町高天原遺跡・加世田市梶ノ原遺跡で、縄文時代早期のものが見つかっており、一貫した道具の使用実態を知るうえで貴重な遺跡である。

小範囲の発掘調査であるが、こうした遺跡は埋蔵文化財保護行政の中でしか把握されないであろうから、遺跡の性格とともに、行政発掘として資料を積み上げて行く醍醐味を感じさせる遺跡である。遺跡の成果を十分に活用し、今後の遺跡での類例の増加や薩摩半島での縄文時代早期の人々の行動の痕跡から、その自然利用の在り方まで発展的に歴史を構築する目的意識のもとで、発掘調査へかかわっていききたいものである。

第2表 出土土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土 層	胎 土					焼成	色 調		調 整 , 文 様		炭化物 附着	標高 (m)
			石英	長石	角閃石	金雲母	砂礫		外	内	外 器 面	内器面		
第 7 図	1	IV	◎	○	—	△	◎	○	赤褐色		ナデ, 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕	ナデ, 刻み		113.07
	2		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色		ナデ, 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕	ナデ, 刻み		113.18
	3		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色		ナデ, 貝殻腹縁刺突	ナデ, 刻み		113.085
	4		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色		ナデ, 貝殻腹縁刺突	ナデ		113.08
	5		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色		ナデ, 貝殻腹縁刺突	ナデ		112.985
	6		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色		ナデ, 貝殻腹縁刺突	ナデ		113.23
	7		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色		ナデ, 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕	工具ナデ		113.175
第 8 図	8		◎	○	—	△	◎	○	暗灰色		ナデ, 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕	工具ナデ	○	113.045
	9		◎	○	—	△	◎	○	淡褐色		ナデ, 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕	工具ナデ		113.12
	10		◎	○	—	△	◎	○	淡赤褐色		ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ	○	113.19
	11		◎	○	—	△	◎	○	暗灰褐色		ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		一般
	12		◎	○	—	△	◎	○	暗赤褐色	暗灰色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.205
	13		◎	○	—	△	◎	○	暗赤褐色	暗灰色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.05
	14		◎	○	—	△	◎	○	暗赤褐色	暗灰色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.065
	15		◎	○	—	△	◎	○	暗赤褐色	暗灰色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.025
	16		◎	○	—	△	◎	○	暗赤褐色	淡褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.035
	17		◎	○	—	△	◎	○	暗赤褐色	淡褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.13
	18		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.23
	19		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.065
	20		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.185
	21		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.1
第 9 図	22		◎	○	—	△	◎	○	淡褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.1
	23		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.2
	24		◎	○	—	△	◎	○	暗褐色		ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.145
	25		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.12
	26		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.12
	27		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.27
	28		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.21
	29		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		一般
	30		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		112.995
	31		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.49
	32		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		一般
	33		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.1
	34		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.15
	35		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.06
	36		◎	○	—	△	◎	○	赤褐色	暗灰褐色	ナデ, 貝殻条痕	工具ナデ		113.22
	37		○	○	—	△	○	○	赤褐色		ナデ, 貝殻腹縁連続刺突	ナデ		113.34
38		◎	○	—	—	◎	○	暗褐色		ナデ, 沈線・網目撚糸文	ナデ		113.46	
39		◎	○	—	—	◎	○	暗褐色		ナデ, 沈線・網目撚糸文	ナデ	○	113.69	
40		◎	○	—	△	○	○	暗褐色		ナデ, 沈線・網目撚糸文	ナデ		113.69	
41		◎	○	—	△	○	○	暗褐色		ナデ, 沈線・網目撚糸文	ナデ		113.48	
42		◎	○	—	△	○	○	暗褐色		ナデ, 沈線・網目撚糸文	ナデ		113.62	

第3表 石器計測表

挿図 番号	遺物 番号	器種	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	備 考
第 10 図	43	石 鍬	IV	1.3	1.75	0.48	5.0	赤色チャート	
	44	石 斧		6.4	6.0	2.2	109.07	頁 岩	
	45	石 斧		10.3	8.0	3.0	319.43	頁 岩	
	46	石斧(刃部)		1.0	1.9	0.2	0.73	頁 岩	
	47	石斧(刃部)		2.9	4.4	0.4	7.97	頁 岩	
	48	剥 片		1.4	2.6	0.4	1.04	頁 岩	
	49	剥 片		1.4	2.2	0.2	0.97	頁 岩	
	50	剥 片		2.7	3.6	0.8	7.51	頁 岩	
	51	剥 片		3.8	6.3	1.5	39.4	頁 岩	
	52	礫 器		9.8	14.2	4.6	780	砂 岩	
	53	礫 器		9.8	12.9	2.2	385	砂 岩	
第 11 図	54	磨 石	7.6	5.8	3.1	182.9	砂 岩		
	55	磨 石	6.9	6.5	4.5	278.6	砂 岩		
	56	砥 石	10.3	4.8	4.3	350	砂 岩		
	57	砥 石	12.0	9.7	4.0	940	砂 岩		
	58	砥 石	12.1	7.0	3.6	470	砂 岩		
	59	砥 石	11.0	7.6	3.6	540	砂 岩		
	60	砥 石	19.7	13.3	8.0	2400	砂 岩		

版 圖



遺跡遠景



本調査区全景

図版 2



確認調査
3トレンチ



5トレンチ



5トレンチ土層



確認調査
6トレンチ



7トレンチ



8トレンチ

図版 4



確認調査
9トレンチ



9トレンチ拡幅部分
遺物出土状況



10トレンチ



本調査
ベルトコンベア設置状況



発掘作業清掃状況



発掘作業状況



遺物出土状況（西から）



（東から）



石坂式土器出土状況
(No 2)



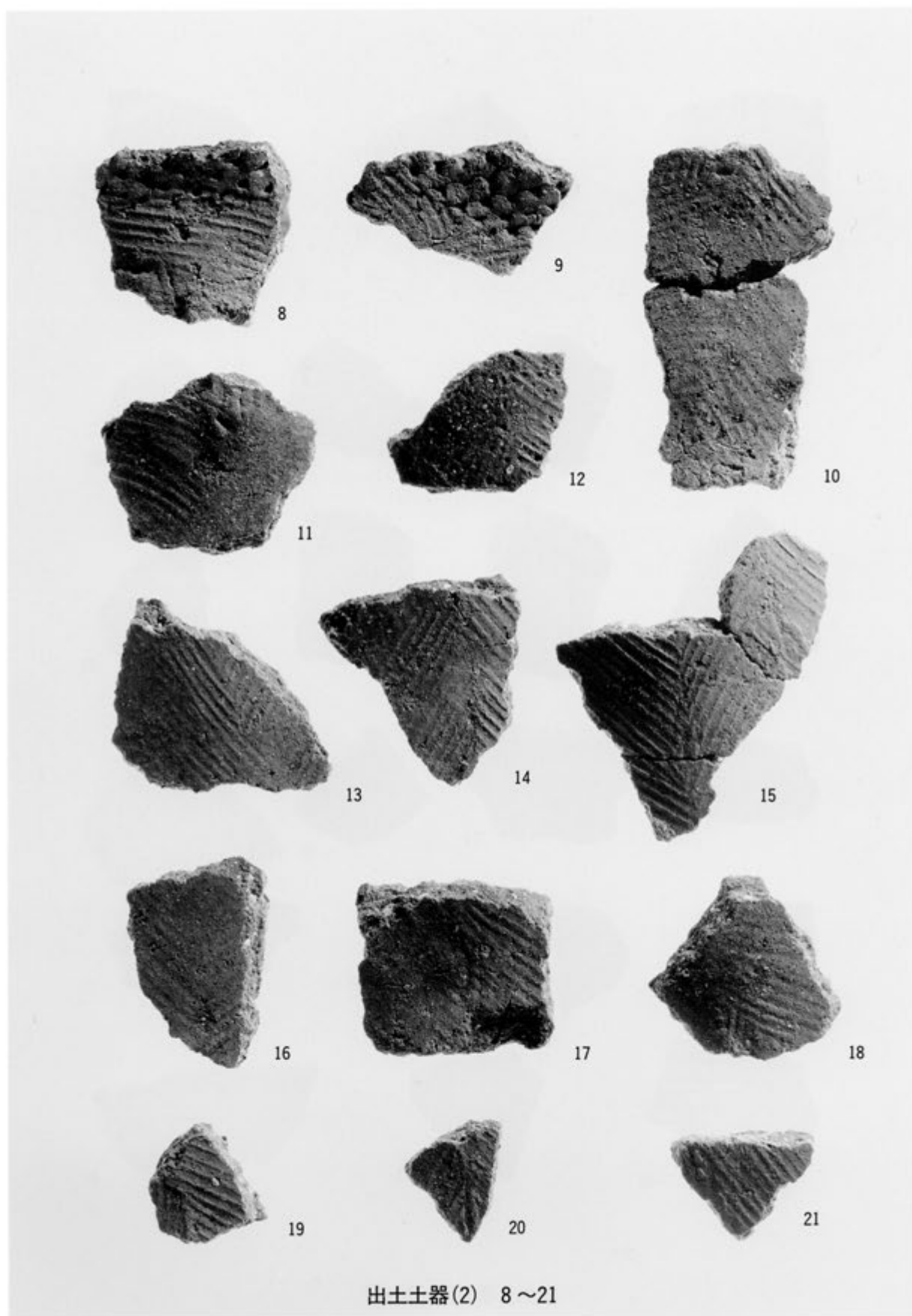
石坂式土器出土状況
(No 44)

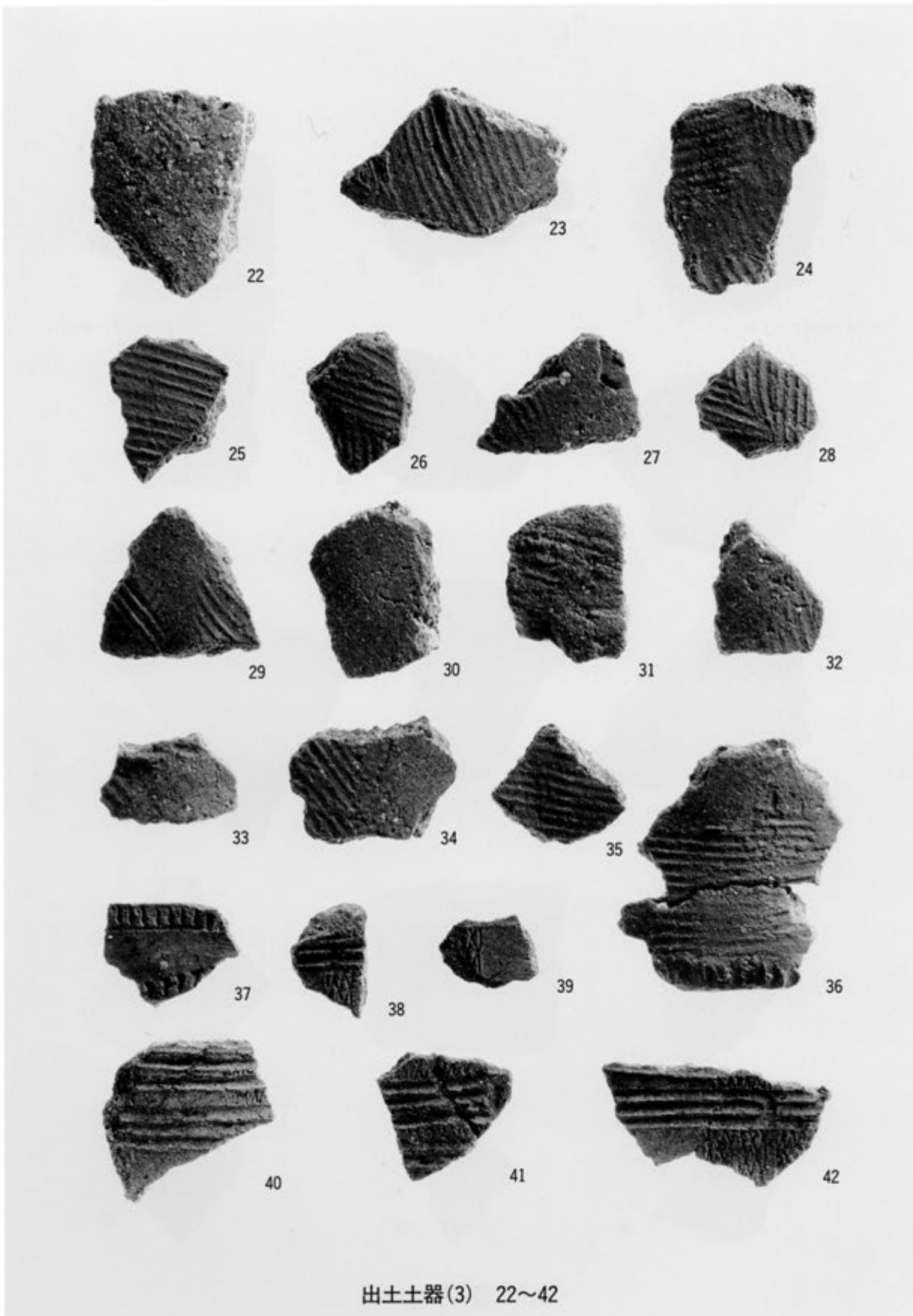


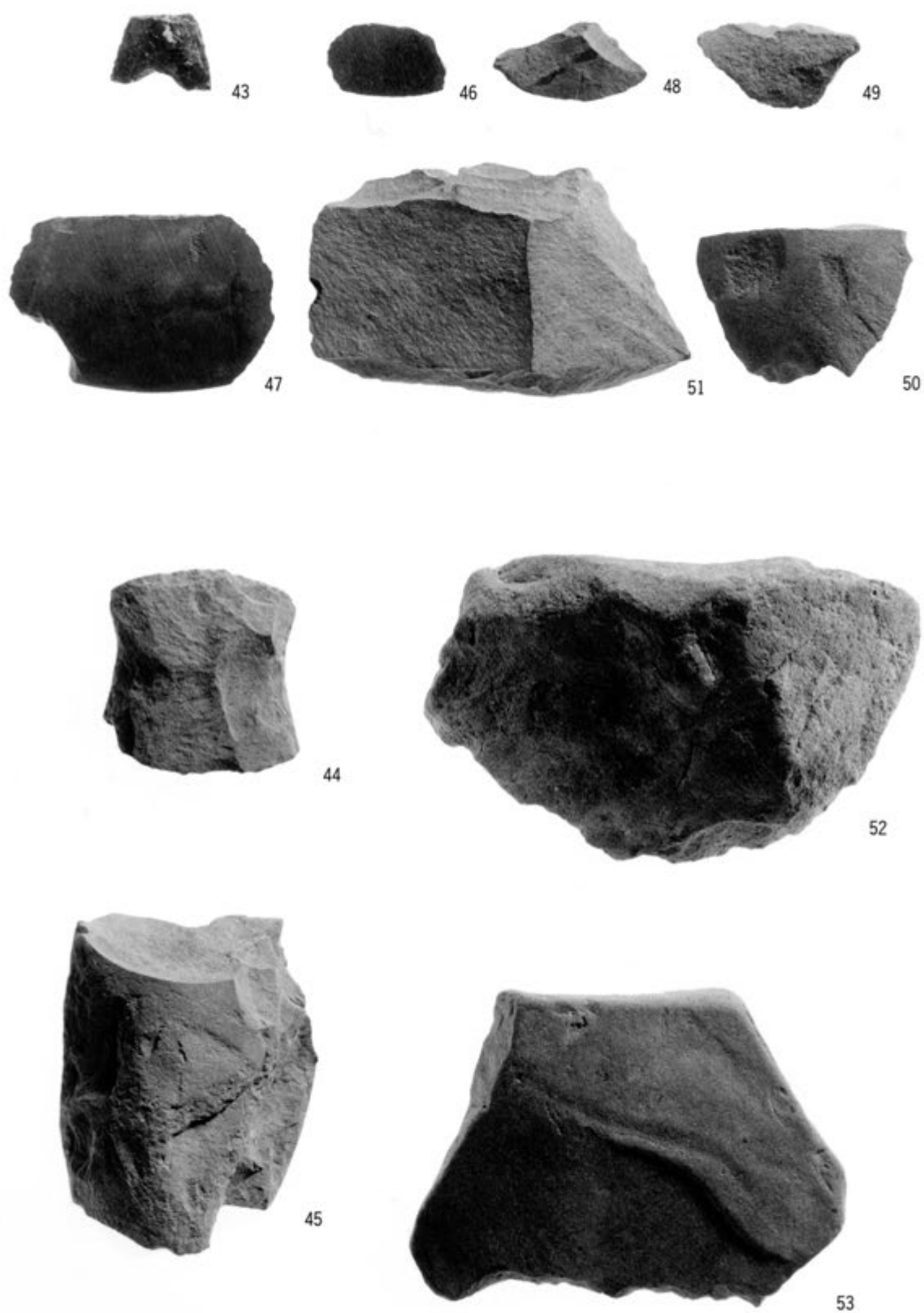
遺物出土状況
(集中状況)



出土土器(1) 1~7







出土土器(4) 43~53



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（47）

鳴野原遺跡

発行 2002年12月25日

編集 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4461

国分市上之段1175番地1

TEL 0995-48-5811

印刷 株式会社トライ社

鹿児島市南林寺町12-6